

# 開港の

# ひろば

YOKOHAMA  
ARCHIVES  
OF  
HISTORY

Number

154

横浜開港資料館  
発行日 / 2023 (令和5)年  
1月28日

特集 幻の写真家

# チャールズ・ウィード



- p.2-5 特別展「幻の写真家 チャールズ・ウィード」  
ウィードの写真と時代を読み解く
- p.6-7 対談「写真家チャールズ・ウィードの実像を探る」  
セバステイアン・ドブソン × 吉崎雅規  
(古写真研究家) (当館調査研究員)
- p.8-9 資料よもやま話
- p.10-13 ミニ展示 / パネル展
- p.14-16 トピック / 閲覧室より / 資料館だより

# ウィードの写真と 時代を読み解く

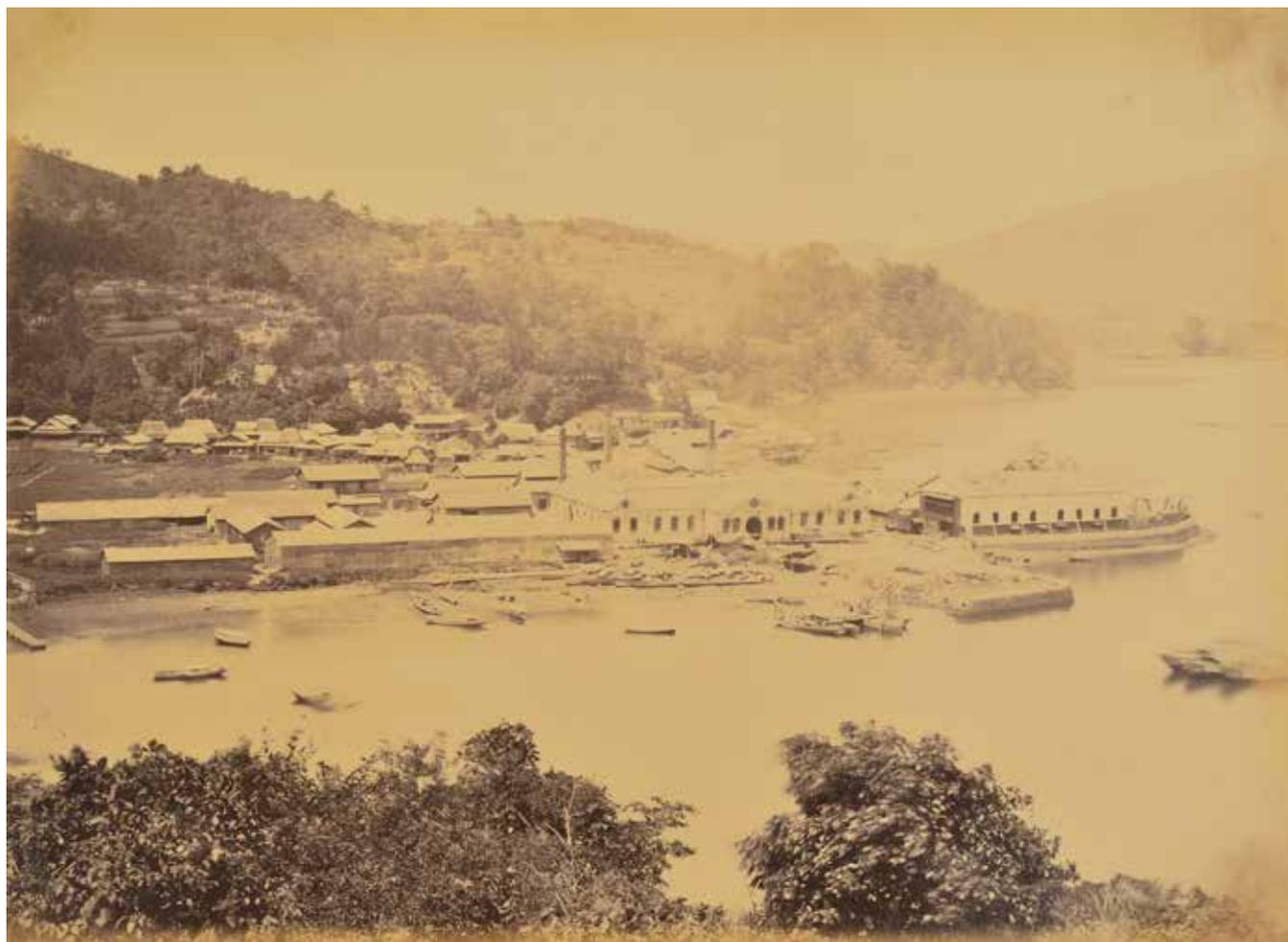


図1 飽の浦の長崎製鉄所 ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵

幕末の日本を写した写真家といえは、フェリーチェ・ベアトがよく知られている。しかし近年の研究の進展により、ベアト以外の外国人カメラマンの存在も徐々に明らかになってきた。なかでも、ほとんど一般に知られてこなかった写真家が、アメリカ人のチャールズ・リアンダー・ウィード (Charles Leander Weed, 1824～1903) である。

ウィードは慶応三(一八六七)～四年に日本に滞在したプロカメラマンで、マシソン・プレートと呼ばれる大型のカメラを使用してスケール感のある風景写真を撮影している。しかし、日本を撮った作品の残存例はきわめて少なく、かつ経歴にも不明な部分が多い、まさに「幻の写真家」と言ってもよい存在だった。国内の公的機関に所蔵されるウィードの写真は三〇枚に満たない。

ところが二〇二一年、ウィードが撮影したと推定される三二枚の風景写真が新たに見出された(岡山洋二氏蔵)。写真は大判サイズ(おおよそ二五×三四センチ)にプリントされ、幕末維新期の日本各地(長崎・江戸・横浜等)の風景が鮮明かつ緻密に記録されていたのである。

今回の展覧会では、初公開となる岡山洋二氏所蔵の写真にくわえ、当館と国内機関が所蔵するウィードの作品も展示し、ウィードの見た幕末日本の風景とその時代背景を紹介したい。

## 長崎の風光

ウィードの日本の写真シリーズは一八六九年、サンフランシスコのトーマス・ハウスワース社 (Thomas Houseworth & Company) より "Oriental Scenery" というタイトルのもと発売された。その日本の部は長崎からはじまる。現存する長崎写真の内容は、①日本の町・



家屋、②外国人居留地と洋式建造物、③郊外の自然風景、のおおよそ三つに分けられるが、それらの要素が詰まっているのが図1、鮑の浦の長崎製鉄所の写真である。同所は幕府が文久元(一八六一)年に竣工させたレンガ造りの洋式工場で、船舶の修理や鉄製造具の製造が可能だった。初期の近代工場の姿をとらえた歴史的資料としても価値があるが、

## 都市横浜のランドスケープ

ウィードの写真の特徴を微づけるスケール感を感じさせる一枚として挙げたいのは、山手から横浜居留地を見晴らした写真である(表紙、

図2)。とくに、図2はウィード以前に日本では前例のないマンモス・プレート・カメラで撮影され、三四・八×五〇・四センチの大判プリントに焼き付けられており、原資料を目の前にしたときその風景の迫力には圧倒される。

撮影地点は現在の元町百

段公園付近で

ある。手前の町並みは元町で、左右に走っているのが堀川。その向こう側に広がるのが擬洋風建築の建ち並ぶ外国人居留地である。中央の橋は前田橋で、その橋の先(奥)に続く道は居留地の主要道路のひとつ、本村通り。このあたりが現在の中華街に相当する。そして、その突き当りのアーチ型の窓を持つ建物が七八番地チャータード・マーカントイル銀行で、その向こうには横浜の海が見える。

山手から横浜を望んだ写真には、元治元(一八六四)年に撮影されたフェリー



図3 旧浜御殿におけるアメリカ公使と勝海舟たち ウィード撮影、1867年、「イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳」当館蔵 後列左端がヴァルケンバーグ、その右隣が勝海舟。前列中央が稲葉正巳と推定される。

チェ・ベアトのものがあるが、比較してみると街の開発が進んでいることがわかる。本写真はウィードの滞在期間からその撮影年代が限定(特定)されるが、この点も歴史資料としての価値を高める。さらに大判ネガで撮影された写真ゆえに、部分を拡大すると都市横浜の細部を観察することも可能になるのである。

## 旧浜御殿での集合写真

風景写真をおもに残したウィードの写真群のなかで、異色とも言える作品が旧

## 日本



図4 長崎の市街地 ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵  
福濟寺（現在の長崎駅付近）から南に長崎の市街地を望む。  
奥の右側には出島も写る。長崎を写した古写真は多いが、あまり見ないショットである。



図6 愛宕山から江戸の市街を展望する ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵  
江戸の愛宕山は外国人がよく訪れる絶景スポットだった。  
左手前が真福寺。一面、江戸の武家屋敷が広がる。

浜御殿（現浜離宮恩賜庭園）で撮影された人物集合写真である。幕末維新史の「主役」のひとりである勝海舟や、アメリカ公使ヴァルケンバーグが写るこの写真は何かしら見る人を惹きつける。この写真はどのような事情で撮影されたのだろうか。

写真の撮影日については、勝海舟の日記の慶応三年九月二三日の項に「米之公使御浜（浜御殿）江来ル、写真有之」とあることから、仮にこの日としておきたいが（すでに先行研究の指摘もある）、それではこの日、どのような会合がおこ

なわれたのだろうか。

この集合写真には被写体を変えた複数のバージョンがあり、そのうちの何人かは名前が推定できる。なかでも注目されるのは、老中格・海軍総裁をつとめる稲葉正巳、海軍奉行大関増裕、軍艦奉行勝海舟である。そして、写真が撮られた浜御殿にはこの時期海軍所が置かれていたことから、この写真は幕府海軍関係者たちとアメリカ公使が会合した折のものとみられる。あらためて勝海舟の日記を確認すると、九月九日の記述に「米海軍艦シヤナトア江、江戸内海之図・大坂

内海之図共ニ二枚公使江頼ミ送り遣す」との記載がある。勝はアメリカ側からの要請によって東京湾・大阪湾の海図を贈っていたのである。この日のアメリカ側の写真撮影は、勝ら海軍関係者の海図提供に対して謝意を示すものであったかもしれない。

幕末というと一口に攘夷の時代と言われるが、慶応三年にはその風潮は収まりつつあり、幕府は外国との親善に意を用いていた。この年の五月、幕府は江戸の料理茶屋などに外国人が入ることを認め、秋にはベルギー・イタリアなど新

たなヨーロッパの国々と条約批准をおこなっていた。この写真が撮影された背景として、日本（幕府）と欧米諸国の親善

関係の進展があったのは間違いない。ウィードの写した写真はその風景の美しさに加えて、背景に潜む歴史的なストーリーを知ることによってよりその価値を増すのである。（吉崎雅規）

【謝辞】 本展の開催にあたり、貴重な写真の出陳をご許可いただいた岡山洋二氏に心よりお礼を申し上げます。

## 【参考文献】

- ・ Terry Benet, "Photography in Japan 1853-1912" Tuttle, 2006.
- ・ 東京都江戸東京博物館蔵「海舟日記（原本）6」

# ウィードの撮った幕末



図5 長崎の郊外の村 ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵  
右手の段々畑が美しい。



図7 金沢八景 ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵  
金沢八景を見晴らせる金龍院の九覧亭から瀬戸・洲崎方向を望んだもの。



## ウィード写真の魅力

吉崎雅規(以下吉崎) 今回は特別展「幻の写真家 チャールズ・ウィード」の開催にあわせて、幕末の古写真に詳しい古写真研究家のセバステイアン・ドブソンさんに、ウィードについていろいろお伺いしたいと思います。本日はよろしくお願ひします。

セバステイアン・ドブソン(以下ドブソン) よろしくお願ひします。

吉崎 私は二〇〇四年に、ドブソンさんからチャールズ・ウィードの写真を見せていただいたことがあるのですが、それがウィードという写真家との初めての出会ひでした。ドブソンさんがウィードを知ったのはいつごろですか。

ドブソン その数年前、二〇〇一年くらいのことです。

吉崎 それまでは、まったく知られざる写真家だったんでしょうか。

ドブソン アメリカではカリフォルニアの名所を撮影したカメラマンとして少しは名がりましたが、日本での撮影は知られていませんでした。研究もほとんどない写真家です。

吉崎 初めて見たウィードの写真のなかで惹かれたのは、二番目のイギリス公使館・高輪接遇所の写真でした。幕末維新期に短期間しか存在しなかったこの施設の写真が残っていたことに驚いたものです(図2)。

# 写真家 チャールズ・ ウィードの 実像を探る

対談：セバステイアン・ドブソン×吉崎雅規  
(古写真研究家) (当館調査研究員)



図1 セバステイアン・ドブソン氏

ドブソン 珍しい写真ですね。吉崎 ドブソンさんはウィードの写真のどのようなところに惹かれたのでしょうか。

ドブソン ウィードの写真に見える美意識でしょうか。ベアトにも感じますが。

吉崎 私はウィードの写真が、幕末の歴史的瞬间を切り取っているところ、つまりその歴史資料としての価値に惹かれているのですが、芸術性も高いんですね。

ドブソン そうです。吉崎さんとは逆ですね。ベアトとウィードは芸術性が高いカメラマンだと思います。しかし、ウィードのキャリアにはわからないところが多い。しかし、二〇年近く少しずつ調べて

きたら、ぼつぼつと資料が出てきました。

## ウィードのキャリア

ドブソン ウィードはサンフランシスコで写真館のアシスタントとしてキャリアを開始し、ほかの写真家よりも早くヨセミテ渓谷を撮影しています。そして、一八五九年の終わりに急に中国に行こうと決めます。

吉崎 ベアトも日本に来る前は中国で活躍していました。

ドブソン 一八六〇年に香港に到着したウィードは写真館を設立しています。香港では肖像写真の需要が大きかったので。

吉崎 当時、多くのイギリス人が中国の開港都市に来ていましたね。

ドブソン しかし、ウィードはいつたん一八六二年にサンフランシスコにもどり、今度は兄弟とハワイに行つて一八六五年に写真館を設立。さらに一八六六年には香港でスタジオをオープンさせます。

吉崎 各地を転々としているんですね。ドブソン 彼のキャリアは旅のようですが、写真の販売や営業は得意ではなかったような気がします。初期のウィードの写真を販売したハウスワースは彼の名前をクレジットしていませんし。

吉崎 そして明治維新の直前、一八六七年に来日して、マンモス・プレートという大型カメラを持ち込んで写真撮影をおこなうことになるんですね。

## マンモス・プレート写真

ドブソン マンモス・プレート写真とは、ひじょうに大判のガラス板(各種のサイズがあるがおおむね四三×五三センチ程度)をネガとする大判写真のことです。

吉崎 迫力がありますよね。これは新しい技術なんですか。

ドブソン マンモス・プレートじたいは一八五〇年代からありました。しかし、さほど多くの写真家が使っているわけはありません。

吉崎 ベアトが使っている事例もないよ



図2 高輪接遇所 ウィード撮影、1867～68年、  
「イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳」当館蔵



図3 根岸不動坂 ウィード撮影、1867～68年、岡山洋二氏蔵



図4 マンモス・プレートカメラ ウィード撮影、1867～68年、  
「イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳」当館蔵  
右手前に置かれている。奥は鎌倉長谷の大仏。

うです。ね。

ドブソン ウィードは他のサイズの写真も残していますが、彼の芸術性をよく感じさせるのはマンモス・プレートです。

この大きさは油絵と同じくらいですが、展覧会でも見栄えがして自宅の飾りにもなります。つまり、大判写真は油絵などの絵画芸術と対抗することができたのです。

吉崎 私も実見しましたが、たしかにそのサイズ感が魅力ですね。

ドブソン マンモス・プレートだと、彼の構図のよさが際立ちます。ただし岡山氏所蔵の写真は、マンモス・プレートのネガ板からより小さいポートフォリオサイズ（約二五×三五センチ）の鶏卵紙に

焼き付けられたものと推測しますので、本来の広い画角から周囲が切り取られ、構図が変わっていることに注意が必要です。

吉崎 なるほど。しかし、なぜせっかくマンモス・プレートという大判で撮影したのに、少し小さいサイズで焼き付けたのでしょうか。

ドブソン マンモス・プレートのプリントだと、ポートフォリオサイズの二倍くらいの価格がします。だから、ポートフォリオサイズのほうが売れたんです。そういう理由もあったかもしれません。でも理由は断言できません。

## 忘れられたウィード

吉崎 ウィードの日本の作品は売れたんでしょうか。

ドブソン あまり証拠があるわけではないんですが、ウィードの作品が滅多に市場に出ないことを考えると、あまり売れなかったのではないのでしょうか。北米でウィードの写真をもっている博物館は二館くらいなものです。

吉崎 でも欧米では日本の風景が人気でしたよね。

ドブソン そうです。ヨーロッパでは人気がありました。アメリカではウィード以前だと、二回しか日本の写真が販売されていませんから、出版社は日本の写真は売れると思ったのでしょうか。

ドブソン そうですね。ウィードの撮影技術の評価はアメリカでも中国でも高かったのです。ベアトと並び立つ存在と言っているかもしれません。けれども、東洋での作品があまり残らなかったのが忘れられてしまったのです。

吉崎 それで「幻の写真家」になっていたのです。

ドブソン 横浜開港資料館の今回の展示は、私の知る限り、欧米も含めて初めてウィードに焦点をあてた展覧会です。観るのをとても楽しみにしています。

吉崎 この知られざる写真家が撮った素晴らしい幕末日本の風景を、ぜひ多くの皆さんにご覧いただきたいと思っています。

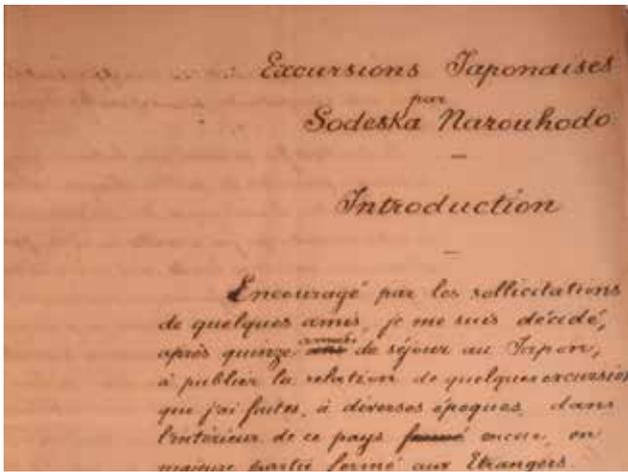
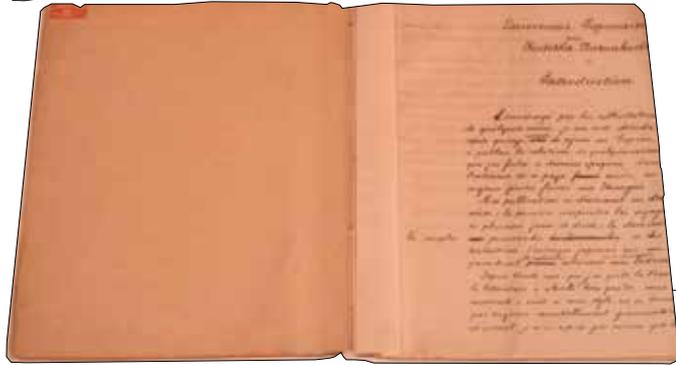


【資料①】グダローの自筆稿本



# グダローの 自筆稿本

## “Voyage à Niigata”



【資料②】序文（拡大）

### はじめに

当館が所蔵する海外資料のなかに、自筆稿本のノート四冊がある【資料①】。そのノートは、一八八九年にパリで刊行された『Excursions au Japon』(『日本旅行』)、のもとになったもので、作者はフランス人のギユスタヴ・グダロー(Gustave Goudareau)という人物である。当館のブルーム・コレクションにも一九〇二年版(第五版)が収蔵されている。さらに一九八七(昭和六二)年には、井上裕子氏により翻訳され、『仏蘭西人の駆けある記』(まほろば書房)として出版されている。

幕末以降、日本と外国との本格的な異文化交流が始まり、外国人が記した旅行記などは、彼らの視点から見た当時の日本の社会情勢、今では失われた民俗や文化を伝える貴重な資料である。本稿では、当時の外国人の立場や社会状況をグダローの旅行記から紹介する。そして、今後の横浜外国人社会の研究についで述べたい。

### 自筆稿本

この自筆稿本は、『Voyage à Niigata』(『新潟旅行』)のタイトルで、一八八六(明治一九)年八月一九日から三二日までの旅行記録である。序文の一八八七年四月三〇日の日付からグダローが旅行後にノートに記録をまとめたものになる。作者名には Sodeska Narouhodo (そうすかなるほど) とある【資料②】。なぜ、この日本語なのかと考えるに、画家ジョルジュ・ビゴの作品「日本人の生活」(『La vie japonaise』)にもソーデスカ夫妻が登場することから、外国人にとつてよく耳にした日本語なのかもしれない。序文から当初、グダローは刊行する気がなく、このような名前になった。ノートと『日本旅行』を見比べると少し表現が違ったり、自筆稿本にしかない記述もある。

### グダローとは何者か

作者グダローについては、ほとんど記録が残っていない。序文に日本滞在一五年後と記されていることから、一八七四(七五(明治六〇七)年頃に来日したと推察する。彼の生年が一八三九年なので、三〇代半ばに日本を訪れたことになる。

そこで、彼の活動を知るために、『The Chronicle & Directory』(以下①)と『Japan Directory』(以下②)から見ていくとする。①でグダローの名の初出



【資料③】「横浜周辺外国人遊歩区域図」ホーズ編（1867年） 赤線が遊歩区域の境界を示している。

は一八七六年であり、職業はワイン商であった。②では、一八七五年に横浜の一六六番（現在の山下町一六六番周辺）で商社を営業していたことがわかる。途中から領事館の職員となり、②では一八八四年から事務員として勤務し始め、①で一八八六年から外務書記として働いている。その後、グダローは横浜以外にも香港や長崎の領事館でも勤務している。①と②ともに、一九〇八年以降名前は見え、六九歳となりフランスに戻ったのかもしれない。

## 内地旅行免状

ここからはグダローが旅した当時の日本の状況について説明する。グダローが長く住んだ横浜は、日米修好通商条約をはじめとした欧米諸国との条約締結により、一八五九（安政六）年に開港場となり居留地を形成した。外国人旅行者や在留者たちは、幕府が開港場から十里四方範囲（約四〇キロ）を「遊歩区域」と定めた区域の外に出ることを禁じられた【資料③】。この遊歩区域外を内地と呼び、そこを旅することを「内地旅行」といった。明治政府は、一八七四年に遊歩区域外での旅行を許可する基準を定め、区域外に出る外国人には「内地旅行免状」（パスポート）の携帯を義務付けた。グダローも、旅館にて「パスポートを隅から隅まで全部写し取られた」と記述しており、彼も旅行免状を所持していたことが

わかる。この旅行免状は一八九九（明治三二）年に居留地制度が撤廃され、外国人に日本全土の旅行・居住・商業活動が認められたことで消滅した。

## コレラの蔓延

グダローはたびたびコレラについて触れ、日本人のコレラに対する恐怖心を記述している。一八八六年はコレラが大流行した年で、患者一五万人、死者一〇万人を数えた。フランス外務省文書室所蔵の在横浜フランス領事館の文書群のなかに、一八八六年七月二一日付本国外務省に宛てた書簡があり、横浜でコレラが蔓延している状況を伝えている。グダローもこうした状況下で旅をしながら、コレラの蔓延による人々の不安な様子を克明に記している。

## おわりに

グダローの旅行記は、約一四〇年前の外国人から見た日本の姿を伝えてくれている。こうした外交官や旅行家の滞在・旅行記として刊行されたものとは違い、居留地で暮らした外国人が記した未発表の資料は、日本と外国との異文化交流だけでなく、横浜居留地における外国人社会の実態を伝えてくれる。こうした資料もまだどこかに眠っているはずであり、当館では今後にも収集・調査・研究し、横浜の外国人社会の実態を明らかにしていきたい。

（白井拓明）



記念ホールでのパネル展示

三二展示

## 横浜海岸教会 誕生から一五〇年

会期：2022（令和4）年5月  
27日（金）～8月25日（木）  
前期「教会の誕生と発展」…5  
月27日（金）～7月3日（日）  
後期「震災からの復興」…7月  
5日（火）～8月25日（木）

二〇二二（令和四）年は、鉄道開業一五〇周年のトピックに沸いた年でしたが、横浜におけるキリスト教受容の歴史にとっても、今から一五〇年前の一八七二（明治五）年は重要な年でした。この年の三月一〇日、改革派の宣教師バラから受洗した二人の信徒によって、日本最初のプロテスタント教会であ



新会堂定礎式 1932（昭和7）年3月10日  
横浜海岸教会所蔵

る日本基督公会が創設されました。これが現在の横浜海岸教会にあたります。日本基督公会は、居留地一六七番地（現在の教会所在地）に建てられた小さな会堂を拠点に、その後のプロテスタント伝道を中心とする人物を多く輩出しました。バラが建設した小さな石の会堂はやがて手狭になり、一八七五（明治八）年に、建築家スメドレーの設計による大会堂が落成しましたが、これらの会堂は、一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災で倒壊してしまいます。震災後、教会の活動は木造の仮会堂で続けられましたが、一九三三（昭和八）年に、横浜出身の建築家雪野元吉の設計で、鉄筋コンクリート造の会堂が完成しました。会堂は一九四五（昭和二〇）年の横浜大空襲

を乗り越え、一九八九（平成元）年には横浜市認定歴史的建造物となりました。当館では、二〇一五（平成二七）年に、横浜海岸教会から四八六点におよぶ資料の寄託を受けていますが（石崎康子「横浜海岸教会所蔵資料の公開にあたって」『開港のひろば』第一三二号）、本展示ではこれらの寄託資料を中心に、前期と後期の二期に分けて展示を構成しました。資料の選定には、横浜市歴史博物館の主任学芸員石崎康子氏の協力を得て、「教会の誕生と発展」と題した前期展示では、教会草創期の日本人最初の牧師である稲垣信の関係資料を紹介し、「震災からの復興」と題した後期展示では、関東大震災で罹災した教会の復興に向けた活動を取り上げ、当時の総会記録や完成した会堂の記念絵葉書などを展示しました。また本展示では、常設展示室二階の特別資料コーナーに加えて、旧館の記念ホールを第二会場として関連パネル展示を開催しました。パネル展示では、横浜市認定歴史的建造物である現在の会堂が建設されるまでの過程を、建築家雪野元吉の設計資料等から紹介しましたが、新会堂の建設工事での鉄入れ式や定礎式などの写真資料は、横浜海岸教会からあらたにご提供いただきました。これらの新出資料は、一五〇周年を迎えた横浜海岸教会が刊行した『横浜海岸教会一五〇年史』（二〇二二年）で公開されており、当館閲覧室でも同書をご覧いただけます。



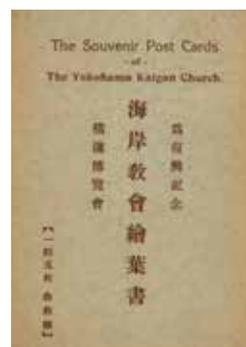
現在の会堂



震災前の会堂



石の会堂



1935（昭和10）年発行  
横浜海岸教会所蔵・当館保管  
1935（昭和10）年に開催された復興記念横浜大博覧会にあわせて発行された記念絵葉書。

本展示の開催にあたっては、横浜海岸教会の上山修平牧師、川村洋士氏から、資料提供をはじめ多くのご教示をいただきました。御礼申し上げます。（青木祐介）

## 鉄道技師の関東大震災—木村義麿旧蔵資料を中心に—

会期：2022（令和4）年8月26日（金）～11月24日（木）

二〇二二（令和四）年は一八七二（明治五）年の鉄道開業から一五〇年目の節目の年にあたります。日本の鉄道二五〇年の歴史は決して平坦なものではなく、様々な苦難がありました。その一つが一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災です。この地震では、鉄道の被害も大きく、線路や橋梁、トンネルは各所で破壊されました。これによって人の流れだけでなく、物流も停止します。

そうしたなか、全国の鉄道を管理、運営する鉄道省は、各地の鉄道局から技術職員を集め、鉄道網の早期復旧をめざしていきます。被災地の鉄道網は一九二三年末までに応急的に復旧しますが、橋梁やトンネルの



熱海線の復旧工事に従事する鉄道省職員 1924（大正13）年6月9日  
木村義麿旧蔵資料、当館蔵

復旧には時間を要しました。特に震源に近い東海道本線、熱海線の被害は大きく、工事は一九二五（大正一四）年まで続きます。その関係者の一人が神戸鉄道局の技手だった木村義麿です。震災後、木村は東海道本線及び熱海線の工事を担当する国府津改良事務所に所属し、馬入川橋梁や白糸川橋梁の復旧に従事します。そして自らに関係した工事関係の写真（鉄道省写真技師の撮影）を整理、保管し、現在に残してきました。本展示では、木村義麿旧蔵資料から鉄道の復旧工事の様子を紹介しました。（吉田律人）

## 新発見！ 江戸城の手書き 絵図

会期：2022年11月25日（金）～2023年2月23日（木）

当館では二〇二〇年度、市内在住の田村邦男氏より江戸城の御殿絵図が含まれる資料群（全六件）の寄託を受け、内容の調査研究を進めてきました。その結果、絵図二枚が天保後期（二四〇年前後）に制作された江戸城西丸御殿の絵図であることが判明しました。

江戸城の西丸御殿とは將軍の世継ぎや將軍を退任したいわゆる「大御所」が居住する御殿です。絵図は西丸御殿のうち「中奥」と呼ばれる主人（世継ぎ等）が日常生活を送る場所をおもにあらわしていますが、一枚は現場の大工が描いたものと思われ、設計の変更部分が懸紙（大きな付箋）で示されています。もう一枚はその清書図で、こちらには「表」（執務空間）もあわせて描かれています。のちに二代將軍となる徳川家定が西丸に移るタイミングでおこなわれた改修工

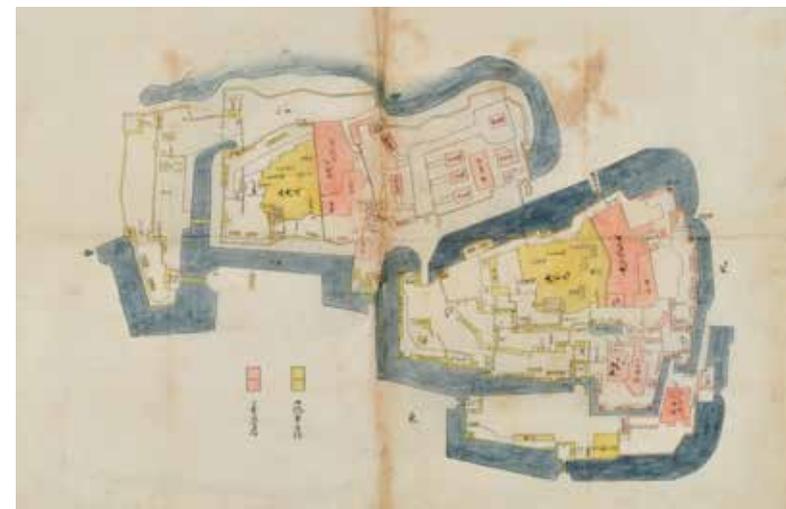
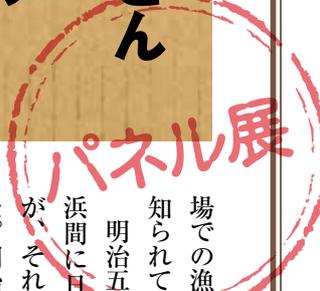


図1 〔江戸城普請受持図〕田村邦男氏寄託、当館保管

事の内容を示したものと推測されます。くわえて、資料群には江戸城全体の工事分担を示した図（図1）や建築部材のイラストなども含まれていました。スペースの関係上、主要な絵図面はパネル展示となりますが、江戸時代後期の江戸城の姿を描いたこの貴重な資料群をぜひご覧いただければと思います。なお、本絵図の分析にあたっては東京都公文書館の小粥祐子氏から多大な教示を得ました。田村邦男氏と小粥祐子氏に心よりお礼を申し上げます。（吉崎雅規）

# ちむどんどん する街 横浜鶴見の 今昔

(いまむかし)



場での漁がさかんに行われていた生麦も知られています。

明治五(一八七二)年には、新橋・横浜間に日本で最初の鉄道が開業しますが、それと同時に鶴見駅も設置されました。明治時代以降、江戸は東京となり、日本の中心として西洋の新たな事物が流入し、文明開化の波とともに人や物、情報などの移動にかかるスピードは急速に上がっていきました。

NHK連続テレビ小説の舞台として注目が集まる「横浜市鶴見区」は、江戸時代、東西に東海道がはしり、川崎と神奈川の宿場に挟まれた間の宿として多くの人々の往来で賑わいました。江戸城へ魚類を献上する御菜浦として、江戸前の漁



鶴見停車場 1872(明治5)年頃 横浜開港資料館蔵

東京近郊に位置する鶴見区も、この時期から臨海部を中心に埋立や工業地帯の形成により大きく街の様子が変化した地域です。またそこには、全国から移り住みさまざまな産業に従事した多くの人々が暮らしており、生活の場としての街も大きく発展してきた歴史があります。現在にもつながるそうした街の変化や、国

内各地から集った人々は、故郷を同じくする人々「同郷者」のつながりの中でどうのように暮らしてきたのかを考えるきっかけにしたいと考え、パネル展示や関連講座では街の移り変わりや地方から鶴見に移り住んだ人々のつながりが見える資料を紹介しました。

展示で紹介した『沖繩商工名鑑』(沖縄興信所発行)は、県内のあらゆる業種の事業者が網羅されているだけでなく、本土在住の事業者名簿も収録されている点が注目に値します。「川崎・横浜市」部分には、会社経営者を中心とした氏名・住所・沖縄の出身集落名が記載されています。また、昭和四六年に発行されたものは西暦「一九七一年版」と表記され、本土復帰や中国との国交正常化以前の国政を反映し、地政的に近い台湾の事業者

◆営業種目◆

電設資材総合販売

電線、ケーブル●電線管、ダクト  
照明器具●配分電盤●キュービクル  
制御機器●配線器具●インターホン  
音響、警報機器●板金加工  
装柱、接地材●作業用工具

中央電材株式会社

取締役社長 仲村 将得

本社 東京都渋谷区神南町1-20-9 電話(463)771180  
支店 東京都杉並区南荻窪4-45-13 電話(333)661180  
支店 東京都渋谷区初台2-6 電話(379)338180

---

土木建築業

【営業種目】

製缶・配管・土木  
解体・運送

株式会社 神谷組

取締役社長 神谷 輝一(島尻出身)

鶴見沖繩県人会々長  
空手道興道館関東本部顧問

横浜市鶴見区仲通2丁目68 電話045-501-4339  
511-1232  
自宅 521-5657

-458-

『沖繩商工名鑑』における情報掲載状況  
下段には「鶴見沖繩県人会々長」の記載が見える。



昭和48年版(左)と1971年版『沖繩商工名鑑』

のページが組まれるといった特徴も見られます。

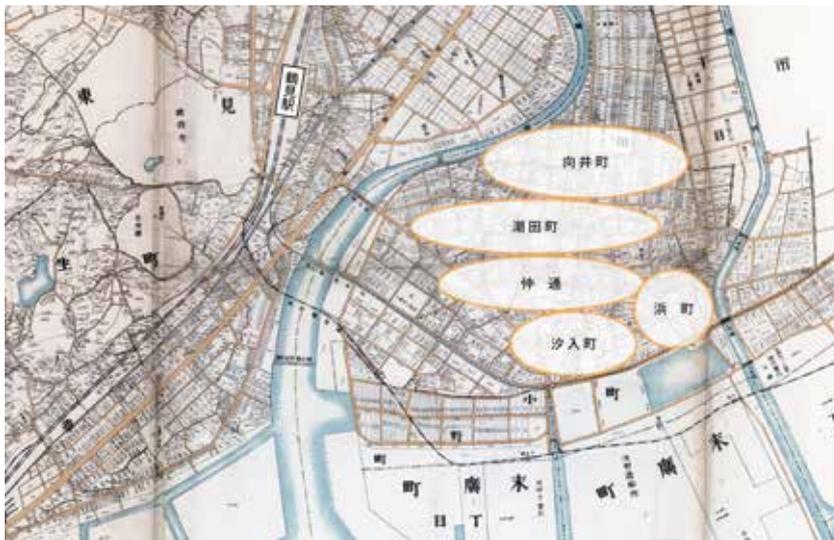
一方で、沖縄が本土復帰を果たした後に刊行された「昭和四八年版」は、前年の日中国交正常化を受け、断交となった台湾の事業者のページが削除されているほか、昭和五〇(一九七五)年に開催の海洋博覧会に関する特集ページが組まれるなど「本土復帰」を契機とした紙面が散見され、当時の社会状況が色濃く反映された内容となっています。

また、本土在住者の名簿にも変化が見られ「川崎・横浜市」部分は、「一九七一年版」では主に会社経営者を中心に川崎市在住五名、横浜市在住一〇名の掲載で

あったところに、「昭和四八年版」では、川崎二四名、横浜四八名と大幅に掲載者名が増加しています。しかも、経歴や出身地の記載がない、氏名と住所だけの掲載者がそれぞれ一八名、三四名あり、これらは本土復帰を機に横浜や川崎に移った人々（経営者ではない労働者層）とみられ、その所在を遠く離れた郷里沖繩に伝える為にこうした情報欄を利用したものと考えられます。こうした県人組織による名簿やその業界団体が作成した名簿などは、かつての個人情報掲載されたもので、取扱が難しい側面もありますが、地域に暮らした市井の人々の歴史を紐解くには分析対象として重要な歴史資料となっています。（羽毛田智幸）



絵葉書「横浜製糖株式会社開業記念（工場全景）」横浜開港資料館蔵  
沖繩出身の多くの労働者が勤めたという横浜製糖



「横浜市鶴見区全図」〔1927（昭和2）年〕に『沖繩商工名鑑』にみる沖繩出身者の鶴見区での居住地を明示したもの。

昭和 48 年版（1973）

鶴見区 仲通	14
鶴見区 浜町	9
鶴見区 汐入町	4
鶴見区 向井町	4
鶴見区 汐田町	3
鶴見区 平安町	2
鶴見区 本町通	2
鶴見区 下野谷町	2
鶴見区 栄町	2
鶴見区 生麦町	1
鶴見区 鶴見町	1
鶴見区 小野町	1
鶴見区 尻手	1
鶴見区 東寺尾町	1
鶴見区 梶山	1
計	48

『沖繩商工名鑑』  
にみる  
沖繩出身者の  
鶴見区居住地

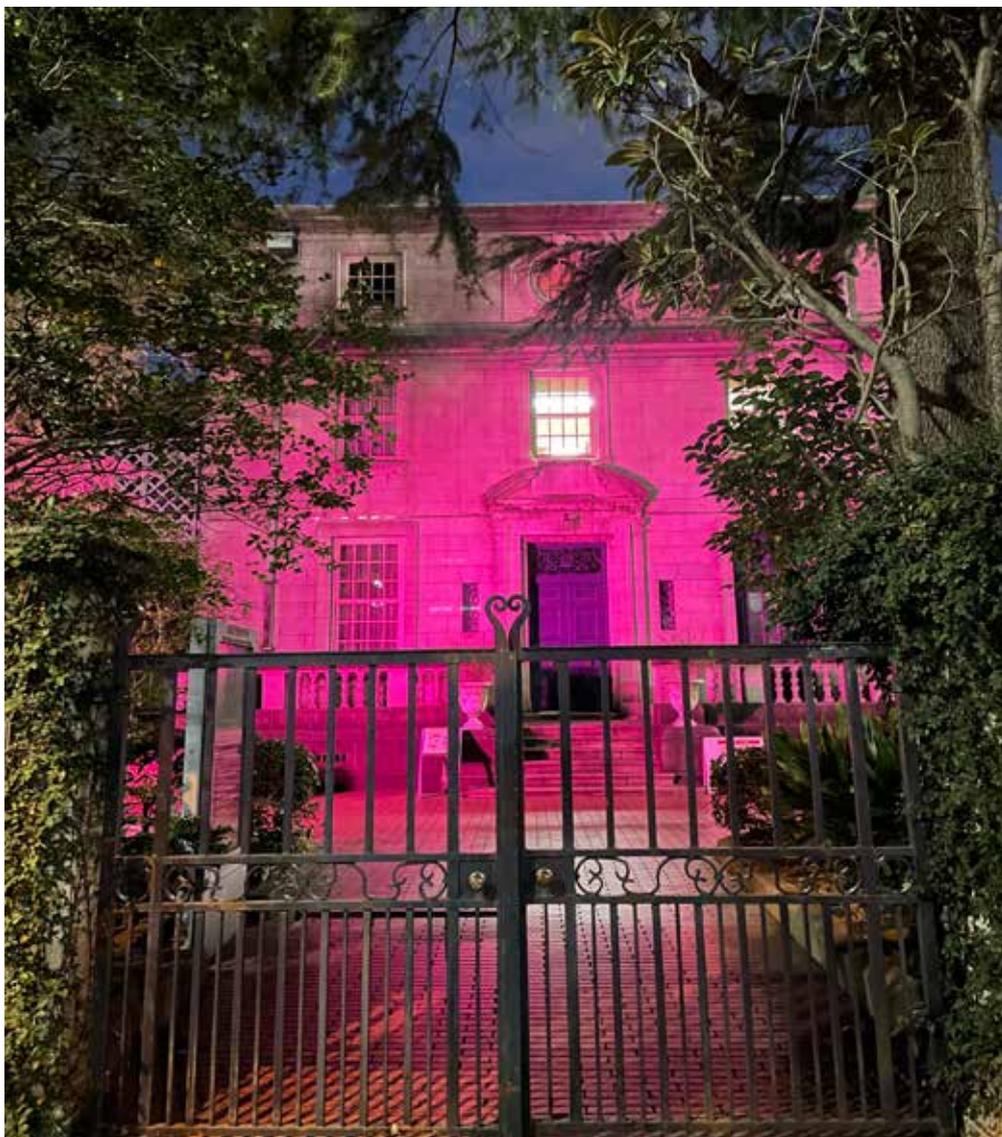
1971 年版

鶴見区 仲通	4
鶴見区 汐入町	1
鶴見区 向井町	1
鶴見区 汐田町	1
鶴見区 梶山	1
鶴見区 向井町	1
鶴見区 下野谷町	1
計	10

単位：人



航空写真にみる鶴見区の変化 1965（昭和40）年の鶴見区（左：国土地理院航空写真データ KT657Y-C6-9・10・14をもとに作成）と1946（昭和21）年の鶴見区（右：国土地理院航空写真データ USA-M46-A-5VV-44・45、USA-M99-A-5-93・94をもとに作成）



# 横浜開港資料館旧館 ライトアップ



旧イギリス総領事館である横浜開港資料館旧館は、昭和六（一九三二）年に竣工し築九〇年を迎えた建物の歴史はもとより、開港場横浜の中心にあって異国の面影を伝える歴史的建造物として、日本大通りや開港広場を行き交う方々、写真撮影や絵画を愛好される方々に大変人気です。

このたび、旧館のあらたな魅力創出にむけて、「ピンクリボンライトアップ二〇二二」が「かながわ」の開催にあわせ、ピンク色にライトアップをおこないました（二〇二二年九月三〇日～一〇月二日の三日間）。神奈川県庁や象の鼻パークといった近隣の多くの施設も同時にライトアップされた日本大通りには、貴重な機会を捉えようとレンズを構えたり、普段とは違った雰囲気や漂う建造物をゆったりと眺めたり、思い思いに楽しむ人々の姿が多く見られました。

今回は、日本大通り側と開港広場側の建物側面をライトアップし、通りや公園からの見学となりましたが、将来的には、当館中庭の「たまぐすの木」や新館などもライトアップすることができれば、夜も楽しめる施設として魅力をさらに増していくことができると思っています。

（羽毛田智幸）

# 閲覧室より

## ◆レファレンスとは？

横浜開港資料館の閲覧室には横浜市内外から横浜の歴史に関するさまざまなお問合せが寄せられます。そうしたお問合せに応じて文献・資料などを紹介する参考調査業務のことを「レファレンス」(reference)と呼んでいます。

レファレンスの中でも特にお問合せが多いのは、やはりペリー来航に関するものです。嘉永7年2月10日(1854年3月8日)、ペリーは横浜村に上陸し、応接所で日米和親条約調印に向けた交渉を行います。現在の横浜開港資料館や神奈川県庁一帯は、この時の上陸地に当たります。ペリー艦隊に随行した画家のハイネは横浜上陸時の様子を描いていますが、その中には当館中庭に立つ「たまくすの木」の当時の姿を確認することができます。

今回は日米和親条約や開港のターニングポイントとなったペリー来航関連の情報を調べるにあたって必読の文献を紹介します。

## ◆描かれたペリー来航

ペリー来航は当時を生きた武士や庶民にとっても興味関心の対象で、ペリー提督や蒸気船を題材とした様々な図像が作成されました。「ペリー来航に関する絵画資料について知りたい」というご要望に対しては、まず当館編集・発行の図録『ペリー来航と横浜』をお勧めしています。これは開国150周年を迎えた2004(平成16)年に開催した同名の企画展の図録で、ペリー関連の基本的な図像をまとめて紹介しています。たとえば、堀口貞明という江戸在住の学者が編纂した「米艦渡来紀念図」(当館所蔵)には、ペリー艦隊の乗員や蒸気船、横浜応接所をはじめ、軍楽隊の楽器、星条旗、硬貨、ハイネの名刺、パン、汽車の模型、電信機、農具などが描かれています。「米艦渡来紀念図」は当館ホームページの「キッズページ」([http://www.kaikou.city.yokohama.jp/kids/kids01\\_q.html](http://www.kaikou.city.yokohama.jp/kids/kids01_q.html))でもご覧になれますので、図録とともにご参照ください。

## ◆ペリー艦隊の公式記録

「ペリーたちの日本における活動の足跡を辿りたい」ということであれば、『日本遠征記』(Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan)をご活用ください。この記録は日本遠征から帰国したペリーが監修し、ニューヨークのカルヴァリー教会牧師の歴史家ホークスが編纂したもので、1856年から1858年にかけてアメリカ議会文書として刊行された、全3巻から成るペリー艦隊の公式記録です。第1巻は遠征記本体、第2巻は琉球・小笠原・台湾における植物・魚類・鳥類などの報告書、第3巻は黄道光(天球上の太陽の通り道に沿って現れる光の帯)の観測記録になります。現在に至るまで、いくつもの版が重ねられてきましたが、第1巻の邦訳である岩波文庫版『ペリリ提

督日本遠征記』は判型も値段もお手頃で、長きにわたり親しまれてきました。ペリー艦隊の動静を日ごとに追跡できますし、ペリーたちの日本観などを調べる際にも大いに役立つはずで。閲覧室では英語版(原文)も閲覧できますので、邦訳と読み比べてみると面白いかも知れません。



『日本遠征記』第1巻

## ◆当館館長のペリー来航論

言うまでもありませんが、ペリー来航は歴史的に著名な出来事です。さまざまな論点から研究が積み重ねられ、多くの文献が出版されてきました。そのため先行研究の「大海原」に飲み込まれてしまい、調査の指針を見失って「漂流」してしまうことがしばしば起こります。そこでお勧めなのが当館の現館長西川武臣著『ペリー来航』(中公新書)です。本書では近年の歴史学研究成果を踏まえつつ、関口日記や堤真和家文書(寄託)といった閲覧室でご覧になれる資料を随所に活用しています。横浜という地域に根差したペリー来航論といえるでしょう。「当時の横浜の人々はペリー来航をどのように受け止めていたのか」。そのような問いに答えてくれる一書です。挿図の「ペリー艦隊 日本遠征航路」や巻末の「ペリー来航関連略年表」も便利です。重厚な研究書に挑戦する前にぜひご一読ください。きっと皆様の調査の「羅針盤」になるはずで。

多様なレファレンスに対応するためには、調査研究の専門領域を超えた幅広い知識や経験が求められます。ゆえにレファレンスは、調査研究員の知見を磨く機会にもなっています。今後とも利用者の方々と調べることの楽しさを共有していければ嬉しく思います。(神谷大介)

## 【参考文献】

- ・横浜開港資料館編『ペリー来航と横浜』(横浜開港資料館、2004年)
- ・ペリリ著/土屋喬雄・玉城肇共訳『ペリリ提督日本遠征記』第1～4(岩波文庫、岩波書店、1948年)
- ・西川武臣『ペリー来航』(中公新書、中央公論新社、2016年) ※いずれも閲覧室でご覧になれます。



## 『開港のひろば』 リニューアル

今号より、全頁カラー、年2回発行にリニューアルしました。これまでどおり資料や研究成果をお伝えするとともに、当館の取り組みや横浜の歴史により親しみを持っていただけるような情報をお届けします。

## 特別展

「幻の写真家 チャールズ・ウィードー知られざる幕末日本の風景」  
会期：2023年1月28日（土）～3月12日（日）



### ●展示関連講座（事前申込制）

(1)「幕末明治を記録した写真術」  
講師：高橋則英氏（日本大学芸術学部特任教授）

日時：2023年2月18日（土）  
14：00～15：30 申込〆切：2月2日必着（ウェブ17：00）

(2)「チャールズ・ウィードとその時代」

講師：吉崎雅規（当館調査研究員）

日時：2023年3月4日（土）  
14：00～15：30 申込〆切：2月16日必着（ウェブ17：00）  
(1)(2)とも

会場：当館講堂、参加費：500円、定員：40名

お申込方法等の詳細は当館ホームページまたは電話にてお問合せください。

●図録『幻の写真家 チャールズ・ウィード』2023年1月28日発売  
予定 A4判変型 1,500円（予価）

## 連続講座 2022

当館の調査研究員が横浜の近代史に関するさまざまなテーマでお話する講座も、盛況のうちに終了しました。これまでの講座は順次アーカイブ配信を行っています（有料）。詳細は当館ホームページをご覧ください。

◆第1回「震災復興を担った横浜市の建築家たち」

講師：青木祐介（2022年9月24日）

◆第2回「戦後混乱期横浜の都市生活一磯子区の時計屋さんの資料より」

講師：吉崎雅規（10月15日）

◆第3回「幕末の海軍と横浜」

講師：神谷大介（11月12日）

◆第4回「横浜近代市民スポーツの歩み」

講師：西村健（12月10日）

◆第5回「フランスと幕末日本—第二帝政の対外政策」

講師：白井拓朗（2023年1月14日）



## 寄贈資料

- ・伊藤和子氏旧蔵資料 119件（鈴木純子氏）
- ・中村宇一郎氏収集文書 8点（中村宇一郎氏）
- ・渡辺勝三郎関係資料 18点（渡邊正直氏）
- ・山尾正斌氏収集資料 20点（山尾正斌氏）

## オンラインショップ

当館発行の図録のほか関連書籍やグッズを販売しています。



### ●横浜開港資料館 利用案内

\*今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。

開館時間 9：30～17：00（入館は16：30まで）  
休館日 月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始ほか  
入館料 一般200円  
小・中学生／横浜市内在住65歳以上100円  
\*特別展開催時の入館料は別に定めます。

### ●閲覧室の利用について

事前予約制（先着順）です。  
閲覧希望日前日（の閉室時間中）までに、電話で予約してください。  
開室時間 10：00～12：00 13：00～16：00  
休室日 月曜日・火曜日（祝日の場合は翌日）、資料整理日、年末年始ほか  
利用料 100円（閲覧室のみご利用の場合）  
電話番号 045-201-2150（直通）

### ●アクセス



- ・みなとみらい線「日本大通り」駅3番出口から徒歩2分
- ・JR 関内駅（南口）、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分
- ・JR 桜木町駅から市営バス「日本大通り駅南側」下車、徒歩1分

#### ●ホームページ

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

#### ●twitter

@yoko\_archives

#### ●管理運営団体

公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

